

ココノイエノシュジンハビョウキデス

作・屋代秀樹

登場人物

古書店の店主(夫)

店主の妻

店主の妹

客

舞台は薄暗い古書店

(鈴が鳴る)

誰もいない古書店に、若い女の客が入ってくる。

店の奥から中年の男(古書店の店主)が出てくる。

夫 いらっしゃいませ。

店主はカウンターに座って本を読み始める。

客はおどおどしながら本を物色する。

夫 買う買わないとか、気にしなくていいので、ゆっくりしてってください。

客 はい……あの……

夫 なにかお探しですか？

客 絵本を探してて……

夫 ああ絵本ですか。うちは児童書は扱ってない……

客 あの、古い本で、タイトルもうろ覚えなんですけど。

夫 そうですか。でもうち児童書置いてないので……

客 あの、外国の絵本で、ペンギンみたいなのが出てくるんですけど、

夫 ペンギンですか。たくさんありそうですけど、うち児童書は……

客 でもペンギンではないんです。なんか白黒で……

夫 ペンギンではないとなると、これは難しいですね。それに、うち児童書が……

客 子どもの頃読んだばかりで、古い本なので、もしかしたらあの、私、その絵本がすごく大好きだっ

だから、友だちの子どもの誕生日プレゼントにどうかと思って。

夫 素敵ですね。でも、残念ですけど、児童書は専門外なんです。たぶんうちにはないですね。

客 ないですか……

夫 すみません。

客 いえ……

夫 駅の反対側でちょっと遠いんですけど、江戸川書店って新刊のお店が児童書に詳しいので、そこだ  
つたらなにかわかるかもしれません。

客 あ、あ、ありがとうございます。

夫 見つかるといいですね。

客 私、普段全然本とか読まなくて、それであんまりわからなくて、ほんとにすいません。

夫 絵本じゃない本を探す機会があれば、またいらしてください。

客 はい、ぜひ。

(鈴が鳴る) 客が店の外へ出ていく。

妹 お客さん？

入れ違いに黒い服を着た女(店主の妹)が店に入ってくる。

夫 なにも買わなかったけど。

妹 若い人めずらしい。

夫 絵本を探してるんだって。

妹 旦那の実家からベーコン送られてきて、豚1頭分くらいあるのかって量。兄さんちょっともらって  
くれない？

夫 ベーコン、そんな食べれないよ。

妹 誰かに配っちゃっていいから。

夫 そんな配る人いないよ。

妹 多少は日持ちするから。義姉さんは？

夫 奥で寝てる。

妹 具合悪いの？

夫 疲れちゃったんだな。昨日外出したから。

妹 2人でどこか行ったの？

夫 古書市に。人多いし、騒々しいからね。  
妹 無理させちゃダメよ。  
夫 でも、行きたいって言うから。起こす？  
妹 ああ、いい。疲れてるんだったら、悪いし。  
夫 お茶いれるよ。  
妹 ごめん、このあと子ども迎えに行かなきゃならんので。  
夫 そう。  
妹 また今度ね。  
夫 で、ベーコンは？  
妹 あ、車に積んであるから。ちょっと取りに来て。  
夫 そんなにあるの？  
妹 本当1頭分くらいあったんだから。

(鈴が鳴る) 店主と妹が店の外へ出て行く。  
しばらくして、古風な身なりの若い女(店主の妻)が店の奥から現れる。  
あたりを見回すが、弱視のため、あまりよく見えない。

妻 あなた。

返事がないので、カウンターまでゆっくりと向かい、イスに座る。  
夫の読みさしの本を見つけて表紙をさする。

(鈴が鳴る)

妻 あなた。  
夫 ああ、席をはずしてすみません。

夫が大きめのビニール袋を持って戻ってくる。  
ビニール袋からは赤黒い影が透けて見える。

妻 お出かけしてらしたんですか。  
夫 いえ、妹が来てたので、見送りに行っていました。

妻 ヨウコさんがいらしたんですか？  
夫 はい。もう帰りましたけど。  
妻 ずいぶん久しぶりですね。  
夫 あれ、そうでしたか？  
妻 しばらくお会いしてなかった気がします。  
夫 そうかな。  
妻 せっかくだからお話をしたかったわ。  
夫 子どものお迎えがあると言っていました。  
妻 子ども？  
夫 あれ、知りませんでしたか？  
妻 いえ、聞いていたかもしれませんが。いやですね。ぼんやりしてて。  
夫 旦那さんのご実家からベーコンが送られてきたそうで、おすそ分けをいただきました。1頭分も送ってきたそうですよ。  
妻 まあ、たいへん。  
夫 今日からベーコン祭りですね。夜はポトフにしましょう。  
妻 明日の朝はベーコンエッグ。  
夫 昼はペペロンチーノを作りましょう。  
妻 明日の夜は？  
夫 夜は、ポトフにしましょう。  
妻 じゃあ明後日の朝はベーコンエッグですね。  
夫 ベーコン地獄かもしれないな。  
妻 少し変なおいがしませんか？  
夫 そうですか？

夫が袋から人のアバラのようなものを取り出して見て確かめる。

夫 ……もう悪くなってるのかもしれないな。処分した方がいいですね。  
妻 せっかくいただいたのに。  
夫 もったいないけど、しょうがないですね。ベーコン祭は中止です。  
妻 残念。  
夫 具合の方はもう大丈夫ですか？  
妻 はい。無理言ってお願いしたのに、ご迷惑おかけしてすいません。

夫 昨日は特にみんな物々しかったから、空気にあてられたんでしょうね。  
妻 少しでもお店のことにのお力になればと思っていたのですけど。  
夫 ずっと家では退屈ですか？  
妻 あなたがいつもいてくれるので、そんなこともないのだけれど。  
夫 あまり無理することもないですよ。  
妻 そうですね。かえってあなたに心配させてしまいました。  
夫 夫婦なんですから、気を遣わないでください。  
妻 はい。  
夫 じゃあ、そろそろ食事の準備をしましょう。少し店番をお願いしてもいいですか。誰も来ないと思  
います。  
妻 あなた。  
夫 はい。  
妻 ヨウコさんはなんのご用でしたの？  
夫 え、ああ、ベーコンを、持ってきました。  
妻 ええ、そうでした。わたしぼんやりしてていけないわ。  
夫 特製ポトフはお預けですが、たしか鶏肉があったので、筑前煮でも作りましょう。  
妻 とをてくう、とをるもう、とをるもう。  
夫 おや、鶏が鳴いていますね。

夫が鶏のものまねをしておどける。

妻 とをてくう、とをるもう、とをるもう。  
夫 父が懇意にしてた大学の先生が亡くなったそうで、明日、蔵書を確認しに行きます。  
妻 とをてくう、とをるもう、とをるもう。  
夫 恋びとよ  
恋びとよ  
有明のつめたい障子のかげに  
私はかぐ ほのかなる菊のにほひを  
病みたる心霊のにほひのやうに  
かすかにくされゆく白菊のはなののにほひを  
恋びとよ  
恋びとよ。

妻 とをてくう、とをるもう、とをるもう。

翌日

妻が店のカウンターに座り、ぼんやりしている。

(鈴が鳴る)

妻 おかえりなさい。

客 え、ただいま。

妻 え？

客 えっと……

妻 どなた？

客 あー、なんていうか……

妻 すみません、わたし、あまり目が見えなくて。

客 あー、えーと、本を買いに来ました。

妻 お客さん？

客 はい、それです。

妻 鍵を閉め忘れてしまったのね。

客 え、営業中じゃなかったですか？ あ、たいへん失礼しました。

妻 あ、いえ、本をお探しなんですよ。

客 あの、探すっていうか……

妻 どうぞ。

客 でも、お休みなのでは？

妻 大丈夫です。わたしがおりますので。

客 はい。

客はしばらくそわそわと本を探すふりをする。

客 あのう……

妻 お探しの本、見つかりましたか？

客 えっと、わたしでも読めそうな本、ありますか？

妻 え？

客 あ、あの、わたし、昨日、ここにお邪魔しまして、その時は男の店員さんがいたんですけど、  
妻 主人ですね。  
客 あ、旦那さまでしたか、その、わたし、絵本を探してて。  
妻 絵本、どんな絵本ですか？  
客 ペンギンみたいなのが出てくる外国の絵本で、でもペンギンではないんです。  
妻 ペンギンのようでペンギンではないっていったいなんでしょうか。  
客 わからないんです、なんか、スニーカー履いてて。  
妻 はあ、絶対にペンギンではないですね。  
客 それで、お屋敷にやってくるんです。  
妻 それをお探しに？  
客 でも、昨日はないと言われて……  
妻 そうでしたか、すみません。  
客 でも、別の本屋さんを紹介していただいたり、親切にさせていただいて、それで、お礼というのも変  
なのですけど、なにか1冊本を買ってみようと思って……  
妻 それはそれは、ありがとうございます。  
客 でも、わたし実はあんまり本を読んだことなく、あまり難しそうなお本だとよめないかもしれない  
……なにか、わたしでも読めそうな本あるでしょうか……  
妻 わたし、実はこのお店にどんな本があるのかわからないんです。目がよく見えないもので。  
客 あ、それは失礼を言いました。  
妻 でも全然見えないわけではないですよ。ぼんやりと、あなたの姿も、そこに、あなたが、いらっ  
しゃるのはわかります。もっと明るければもう少しはっきりわかるのですけど。あ、好きなものは  
なんですか？  
客 本はあまり読んだことないので、なにが好きかもわからないんです……  
妻 好きなものについて書かれた本なら、楽しく読めるのでは？  
客 ……パンが好きです。  
妻 ではパンに関する本を読めばきっと面白いと思いますよ。  
客 パン、パンの本。  
妻 わたしも朝は大概パンなんですよ。  
客 あの、わたし、お米がどうにも苦手です。  
妻 そうなんですか？ 珍しい。  
客 どうにもつづつづしているのがたくさんあると、ダメです。あ、あの、お米ってよく見るとつづ  
つづしているんです。

妻 知ってますよ。わたしも、子どもの頃はもう少し見えていたわ。

客 それはまた失礼してしまいました。

妻 いえ、お気になさらず。お米が苦手だとお食事に苦労しませんか？

客 はい、小学校の給食のときとか大変でした。食べれないと居残りでお昼休みがなくなっちゃうので、ぎゅうって目をつぶって食べました。でも午後はずっと気分悪くて、家帰ったら改めてパンを食べました。なので、小学校の頃はすごく太ってました。

妻 大変でしたね。

客 今はパンしか食べないので痩せています。あの、もしかしたらわからないかもしれないのですが、痩せてるんです。今は。

妻 そうですね、なんとなく、太ってないことはわかります。

客 わたしは、子どものころパンに救われたので、パンに恩返ししたいと思って、今はパン屋で働いています。

妻 好きなものに囲まれて暮らしてるんですね。素敵だわ。

客 はい。でもパンに助けられる側から、いざパンの側に立ってみると、いろいろと大変なこともあるとわかりました。

妻 パン屋さんって朝早いんですね。

客 はい、それもありますし、パンの側になると、時にはパンに厳しくあたらないといけないこともあったりして。

妻 真面目なんですね。

客 わたし、鈍いので、人より一生懸命にやらないとダメなので。あ、あの、わたし、言っていることの意味が分からないとか、要領を得ないとかよく怒られるんですけど、今までの会話大丈夫でしょうか。

妻 え、大丈夫ですよ。

客 イラッとしたりしてませんか……

妻 とても面白いお話でしたよ。

客 はあ……ありがとうございます……

妻 あなたの作ったパンを是非食べてみたいわ。このあたりでお店をやっているんですか？

客 あ、はい、そうなんですけど、じつはわたし、すごく不器用なので、パンを作る係ではなくて、パンを並べたりする係なんです……

妻 そうなんですか。でも並んでないと買えませんから大事な役割ですね。

客 でも、売っているパンはすごくおいしいんです。その、食べるとすごくパンの味がするというか、あの、一口かむごとに、口の中いっぱい、パンを食べてるって感じがすごくして、あのう、伝わ



ってますか……

妻 パンが本当に好きなんですネ。

客 はい……でも、パンの本が見つからないです……

妻 ゆっくり探してください。

客 実はでも、お店の休憩時間に来ているので、もうすぐ終わってしまう……

妻 そうなんですネ……でしたら、主人に、パンの本について聞いてみますので、今度いらっしゃる時までにご用意いたしますわ。

客 また来てもいいんですか……ご迷惑ではないでしょうか……

妻 ちっとも。お客様ですから。

客 ありがとうございます。じゃあ、次来るときは、あの、うちのお店の、パンを持っていきます。

妻 それは楽しみ。

客 あの、じゃあ、すいません。休憩時間もう終わってしまったので、すいません。

妻 それは大変。じゃあ、また、お待ちしておりますネ。

客 はい。

客が店を出ていく。(鈴が鳴る)

(鈴が鳴る)

夫 ただいま戻りました。

風呂敷包みのようなものを持って、夫が店に入ってくる。

妻 お帰りなさい。

夫 もしかして、鍵をかけ忘れてましたか？

妻 そのようでしたネ。

夫 大丈夫でしたか？

妻 お客様が1人いらっしやいましたよ。

夫 常連の方ですか。

妻 昨日、いらしたって、多分女性のお客さんでした。

夫 ああ、絵本探してたって人かな。

妻 きっとその方ですわ。

夫 絵本は見つかったのですかね。

妻 それはおうかがいしなかったけど、ここにはパンの本ってありますか？

夫 パン？ レシピのようなものはないと思いますけど。

妻 レシピとかではなくて、でもなにかパンについて書かれた本ならなんでもいいんです。

夫 パンの会というグループがありましたけど、食べ物についてはいいですね。

妻 できれば難しそうなものではなくて。

夫 うーん、ここにあるのは古い日本のばかりですから、パンの話なんて……あー、現代の小説家が書いたので、パン屋を襲撃するって小説がありました。

妻 まあ。

夫 しかも、2回襲撃します。

妻 その、襲撃する方って、もしかしてお米屋さんだったりします？

夫 よく覚えてませんが、違ったと思います。

妻 お米が苦手で、パンが大好きなそうなので。

夫 じゃあ、そもそもパン屋を襲撃する話なんて、辛くて読めないかもしれませんね。

妻 そうですね、困ったわ。次来るまでにあなたにパンの本を用意してもらおうと思っていたんです。

夫 またいらっしゃるんですか。

妻 はい、約束しました。わたし、あなた以外と、あんなにたくさんおしゃべりしたの久しぶり。

夫 そうですか。

妻 近くのパン屋さんにお勤めしているそうですよ。あなた、知っています？

夫 パン屋ですか。駅前にいくつかあったと思いますけど、どこにも入ったことないなあ。

妻 今度、いらっしゃるときに、お土産いただけるって。

夫 そんなに仲良くなったのですか。

妻 ああ、そうですね、なんだかとても優しくなれたかたでした。わたし、ここにきて、はじめてお友達ができるかもしれません。

夫 そうですか。

妻 お仕事の方はどうでしたか？

夫 だいたい大学に寄付するそうで、残りも一緒に行った同業が引き取ることになりました。

妻 それではお仕事にならないのでは。

夫 形見にというので、父が売ったものを少しだけ買い戻しました。それも本当はいらなかったのですが。

妻 わたしの旦那さまは、あまり商売熱心ではなかったのですね。

夫 僕の本当の夢は、ここにある本が、すべて、綺麗さっぱりなくなることなんです。

妻 一冊残らず？

夫 結局増えたり減ったりで、なかなかうまくはいきませんが。

妻 なにもなくなったら何を売りましょう？

夫 さて、考えてもみなかったですね。

妻 おかしい。

夫 何屋さんがよいですか？

妻 わたしでもお手伝いできるようなことならなんでも。

夫 洋食屋なんかどうだろう。

妻 あなた、お料理は上手ですものね。でも、わたし、お皿を洗うのもお料理をお出しするのもうまくできないわ。

夫 注文をとるくらいなら大丈夫でしょう。

妻 そうだ、パンも届けてもらいましょう。焼きたてのパンを。

夫 ……昨日、町で人さらいが出たそうです。

妻 まあ。

夫 女学生がカバンを残していなくなってしまったそうです。

妻 親御さんはさぞご心配でしょうね。

夫 今日、僕はそんなことがあったのも知らず鍵を忘れて出かけてしまいました。

妻 何もなかったですから。

夫 でも、人がはいつてきたでしょう。

妻 とても良い人でしたから。

夫 でも、万が一、わかったものではありません。

妻 わたしだってもう大人ですから、いざとなればどうとでもしますわ。

夫 でも、君は目が悪いものだから。

妻 いざとなれば噛みつきでもなんでもいたします。

夫 ……

妻 心配してくれて、うれしい。

夫 夫婦ですから。

妻 あなたとはじめてお会いした夜も、あなたはすごくわたしのことを心配してましたわ。

夫 そうだったでしょうか。

妻 わたし、夜道を独りで歩いていて、あなたにお会いしたんです。わたしになんて声かけたか覚えていますか？

夫 さて？

妻 「見ましたか？」って。わたし答えたんです「目が悪いので、こんな闇夜ではなにも見えないんです」って。

夫 なぜ、あのとき、外出していたんですか？

妻 全然覚えてないんです。とても恐ろしい夜でしたわ。どこかから犬の遠吠えが聞こえてきて。

夫 君はひどくおびえていましたね。

妻 だって、あんなに恐ろしい声、はじめて聴いたんですもの。 のをある とをある やわあ

夫 僕は小さな君を、おうちまで送りました。

妻 のをある とをある やわあ

夫 あの時は、また会えるなんて思いもしませんでした。

妻 もう、20年近くも前のことですね。

夫が風呂敷包みから、人の頭蓋のようなものを取り出しかけ、しまいなおす。

夫 しばらくは外の用事ありませんので、僕もずっと家にいます。

妻 のをある とをある

夫 おびえなくても大丈夫ですよ。

妻 のをある やわああ

夫 遠くの空の微光の方から

ふるへる物象のかげの方から

犬はかれらの敵を眺めた

遺傳の 本能の ふるいふるい記憶のはてに

あはれな先祖のすがたをかんじた。

犬のこころは恐れに青ざめ

夜陰の道路にながく吠える。

妻 「犬は病んでゐるの？ お母あさん。」

夫 「いいえ子供 犬は飢えてゐるのですよ。」

数日後

妻がカウンターに座っている。

夫の妹が、おたまと小皿を持って店の奥から現れる。

妹が妻に小皿を差し出す。

妹 義姉さん、ちょっと味見味見。

妻 美味しい。

妹 大丈夫？ ちょっと薄くない？

妻 丁度よいですよ。本当に兄妹そろって、お料理上手なんですね。わたしもお料理してみたいんですけど、包丁なんかはなかなか難しくて。

妹 お菓子とかはどうですか？

妻 分量がわからないので、1人ではなかなか大変で。

妹 今度兄さんと作ってみればいいんじゃない？

妻 お菓子も作れるんですか？

妹 作れるんじゃないかしらね。

妻 じゃあ、今度お願いしてみます。

妹 あの、この前はごめんね。

妻 え。

妹 ベーコン。

妻 あ、いえ。

妹 うちにあった分も悪くなってて、食べたりしてない？

妻 すぐ気づいたので。

妹 生ゴミ押しつけちゃったみたいで、本当に申し訳ない。

妻 全然、気にしないでください。

妹 うちが子どもが最初に気づいて、もう危ないところだったわよ。

妻 お子さんは元気ですか？

妹 元気も元気。ちょっと目を離したらふらふらふらふら。

妻 もうそんなに大きくなったんですね。

妹 みるみる大きくなるわよ。

妻 きっとかわいいんでしょうね。触ってみたいわ。

妹 ……いつも家の中だと気が塞いだりしない？

妻 主人がいつもいますので。でも。

妹 でも？

妻 ……なにか、もっと、わたしでも世の中のお役に立てることでもないかと思うこともあります。

妹 義姉さんは今でも十分、兄さんの役にたってるわよ。

妻　　そうですか。  
妹　　無理して、外出て危ない目にでもあったら、それこそ兄さんがかわいそうよ。  
妻　　近くで、人さらいがあったって聞きました。  
妹　　ほんと、おちおち子育てもできないわよ。  
妻　　本当ですね。  
妹　　義姉さん、なにかあったら、なんでも相談してね。女同士なんだから。  
妻　　はい。ふふふ。  
妹　　なに？  
妻　　おねえさん、というがなかなか慣れなくて。  
妹　　だってねえ、兄さんの奥さんなんだから、義姉さんでしょ。  
妻　　そうなのですが、なにか不思議。わたしがおねえさんだなんて。  
妹　　……そしたら、そのまま、居間で待ってて。もうご飯できますから。

妻が店の奥に去る。

夫　　大丈夫そう？

いつの間にか夫が店にいる。

妹　　いつもと変わらないんじゃない？  
夫　　ちょっと浮ついているというか。  
妹　　むしろ元気になったんじゃない？  
夫　　そうかな。  
妹　　……やっぱり退屈なんじゃない。  
夫　　そうかな。  
妹　　本が読めないのに、本屋にいることほど退屈なことはないでしょう。  
夫　　こんな店はいつでもよしたっていいんだ。  
妹　　そう言って、兄さんはいつまでもやめないでしょう。たいして儲かってもいないのに。  
夫　　呪いみたいなものなんだよ、きっと。  
妹　　自分で思い込んでるからそうなるんでしょ。  
夫　　そうかな。  
妹　　わたしはだって、解放されてるもの。

夫 そうかな。  
妹 そうよ。  
夫 そうかなー。  
妹 ……子どもは作らないの？  
夫 わからない。  
妹 わからないって、そんなのやっちゃえばアレなんだから、わからないもなにもないでしょう。  
夫 下品な言い方だなあ。  
妹 そんなの知らないわよ。  
夫 親父がいて、僕が生まれただろ。  
妹 うん。  
夫 そして、僕から、またなにかが生まれる。  
妹 そうね。  
夫 ひどくいやな話だ。  
妹 おそろしいのね。  
夫 うん。  
妹 でも、何か違うかもしれない。  
夫 そうかな。  
妹 義姉さんは、母さんでもないし、わたしでもないから。  
夫 街に人さらいが出たんだ。  
妹 そうね。  
夫 もう何年も現れなかった。  
妹 おそろしい。  
夫 何も変わってないのかもしれない。

(鈴が鳴る)

パンの入った包みを抱えた客が、店に入ってくる。

客 あ、あの……

夫 いらっしやいませ。

客 あ、あのお料理中でしたか……

店主は、妹の持っていたおたまをいつの間にか持っている。

妹はすでに店内にいない。

夫 あ、いえ、おかまいなく……あー、この前の絵本のお客さんですか。

客 あ、はい、先日はお世話になりました。

夫 絵本は見つかりましたか？

客 あ、あの、ご紹介いただいた本屋さん見つけて、そこにはなかったんですけど、いろいろ説明したら、わかってくれて、どんなタイトルだったのかな、取り寄せてくれることになって、メモをしたんですけど、なんだっけな、うどんだかなんだか……

夫 見つかってよかったですね。

客 はい。でも赤ちゃん向けの絵本じゃないかもしれないって言われて、でも、わたし子どもの頃読んですごく楽しかったんですけど、でも、この作者の本は大人が読む絵本ですよって言われて、プレゼントにはあんまり向いてなかったのかもしれない。

夫 そうですか。

客 それで、困ったなーと思って、別のプレゼントにしようかなー、と思って、それであの、そう、奥さまに、好きなもの本だったらきっと楽しく読めるってお聞きしたので、それでその友達、すごく消防車が好きなので、消防車の絵本ありますかって聞いたらそれは結構あったので、お店の人と選びました。

夫 そうですか。

客 はい、おかげさまでした。

夫 そうだ、パンについての本をお探ししてると聞いたのですが。

客 あ、はい。パンが好きなので。

夫 うちが主に扱っているのは日本文学と研究書なので、パンについてというのはなかなか思い当たらなかったんですけど(本を取り出して)、この人の作品にたびたび出てくる洋食の食事のシーンが、パンが直接表現がされてるわけではないのですが、これがなかなか素敵なんですよ。

客 はい。

夫 ……でも、ちょっと難しいかもしれませんね。童話とか、そういうの方が良かったかな。

客 あ、いえ、でも、せっかく探していただいたのでしたら、それを。

夫 ちょっと読んでみますか。

客 はい。……見たことのない漢字がでてきます。

夫 やっぱ、よした方がいいですかね。

客 いえ、でも、せっかく探していただいたので。頑張ってみます。漢字は、調べればわかりますし……



客はうんうんいいながら、本を読みふける。

夫 あの……

客 あ、今日は、パン屋がお休みの日に来たので。時間は、大丈夫です。

夫 いえ、えーと……

客 あ、そうか、ご迷惑ですよ、立ち読みですものね……

夫 そういうことではないのですが……

客 あの、おいくらでしょうか。それと、あの、漢字辞典とかもしあったら売っていただけないでしょうか……

夫 妻を、呼びましょうか？

客 え、あ、でも、お忙しいのでは……

夫 そんなことはありませんよ。妻もあなたに会いたがっていましたし。

客 そうなのですか。では、じゃあ、是非……

夫 お待ちください。

店主は店の奥へ向かい、妻を伴って戻ってくる。

客 どうも、お邪魔しております。

妻 また来ていただいて。ありがとうございます。

客 いえ、今度はお店がお休みの日に来ようと思って、そしたら時間が経ってしまってすみません。

妻 いえいえ。あ、あなた、お探しの本ってさしあげましたか？

客 はい、すごく素敵な本を選んでいただいて、ほんの少しだけ難しそうですが、でも、今さっき少しだけ読ませていただいたんですが、なんか、すごく本って感じがして、本の匂いもすごくするし、これはすごく良い本だと思います。

妻 喜んでくれて良かった。

客 あ、そうだ。それで、お店のパンを持ってきました。あの、いろんなパンがあるんですけど、今日はすごく普通な感じのパン、あの、中に具が入ってないタイプのパンを選んできました。お邪魔ではなかったら……

妻 ありがとうございます。ちょうど今お食事にしようと思っていたところなんですよ。

夫 でも今日はけんちんですよ。

客 けんちん、よかった、パンによく合いますね。

妻 パンに合うんですか？

客 わたしはけんちんを作ったときはいつもコッペパンを食べるのですが、やっぱりおかしいんじゃないか。

妻 今日はコッペパンもお持ちいただいたのですか？

客 はい、コッペパンもあります。

妻 そしたら、試してみようかしら。

客 あ、はい。よろしくお願いします。

妻 ありがとうございます。

客 あの、これからお食事なのですよ。やっぱりお邪魔になりますので、これでお暇いたします。あの、この本いくらなのでしょうか。あと、もしありましたら漢字辞典も売っていただけないでしょうか……

夫 辞書は置いてませんよ。

客 そうですか。ではこの本の料金を……

夫 それほどたいした値段のしない本なので、あの、パンもたくさんいただいたことだし、そのままお持ちください。

客 え、良いんですか。そんなパンと交換みたいになって。

夫 はい。

客 ありがとうございます。

妻 今日はお仕事お休みなのですか？

客 あ、はい。

妻 でしたら、もし、よろしければ、一緒にお食事を……あなた、よろしいかしら。

客 いえ、そんな、本までいただいたのに、これ以上のご親切は、そんな、恐れ多いです。

妻 いえ、わたしたちだってパンもいただいていますし、あなた、どうでしょうか。

夫 ……そうですね、もしこのあとご予定がないのであれば、粗末なものしかないですがよろしければ、どうでしょうか。

客 本当に、そんな、おかまいなく、このあと、わたし、漢字辞典も買わなきゃいけないですし。

妻 わたし、もっとあなたとお話したいわ。

夫 妻もそう言っていることだし。よろしければ。

客 でしたら、おことばに甘えて。

妻 うれしい。

夫 そしたら、僕は店の番をしているので、ゆっくりしてってください。

客 え、一緒に召し上がらないんですか？

夫 店を空けておくわけにもいきませんから。  
妻 いつものように、お食事の時だけ、休憩中にしておけばいいじゃないですか。  
夫 実は、作っている間になんだかおなかいっぱいな気分になったんです。つまみ食いをしすぎたのかな。  
客 わたしもそれよくやります。できあがったときにもうなくなってるとか。  
夫 ですので、僕のごことは気にせずに、食事をしてきてください。  
妻 それじゃあ、少し寂しいわ。  
夫 僕のごことはいいですから。  
妻 ……はい。あの、お客さまなのに申し訳ないですが、配膳をお手伝いいただいてもいいですか？  
客 はい、もちろん。

妻が客とともに、店の奥に去る。

いつの間にか、妹が店内に戻っていて、立ち去ろうとしている。

夫 食べていかないの？ せっかく作ったのに？  
妹 あー、もうすぐ迎えに行く時間なんで。食べてくれる人がいて良かった。  
夫 どうもなんだかへんなひとだよ。  
妹 でもたしかにやさしそうなのよ。  
夫 会話をしようとしてもグルグルグルグル、なんだか頭がいたくなりそうだ。  
妹 まじめなんですよ。  
夫 コッペパンにけんちん汁って。  
妹 意外と良さそうじゃない？  
夫 給食じゃないんだから。  
妹 もし、ベーコンがあったらポトフでも作ってましたけど。  
夫 ベーコン。  
妹 ベーコンだったらパンに合うでしょ。  
夫 なんでベーコン？  
妹 なんでって、この前持ってきたじゃない、ダメになってたけど。  
夫 誰がベーコンを。  
妹 誰がってわたしよ。  
夫 お前が？ なんで？  
妹 なんでって、実家から送られてきたのよ、ひと1人分くらいの量が。ちょっと大丈夫？

夫 本当はベーコンそんなに好きじゃなかったんだ。

妹 あら、そうだったの。

夫 油っぽくて、どちらかというハムエッグの方が好きだった。親父もそうだったな。

妹 ……お父さんのはなしはやめなよ。

夫 母さんは今朝はハムエッグだって言ってたさ、僕だって聞いたよこの耳でさ。でもでてきたのはベーコンエッグだった。覚えていないかい？

妹 覚えてないけど。

夫 そんなの、たまたまあると思ってたハムがなかっただけで。子どもだってわかるさ、ああ、買い置きだったはずのハムを切らしててたまたまベーコンがあったからそれを使っただけじゃないか。子どもの僕だってわかったよ。

妹 そう。

夫 でも、親父は言うんだ。「おや、これはハムエッグかな？」もちろん親父だって冗談のつもりだよ。「なあ、これは何エッグなんだ？」「おい、これがハムエッグに見えるかい」ニコニコしながらいうんだよ。何度も何度もしつこくしつこく。グルグルグル。

妹 わたし、父さんのことはそんなに覚えてない。

夫 何度も言ってるうちにおかしくなってくるんだ。自分で自分の言ってることに腹がたってくるんだろうな、あれは。まるで竜巻のようだった。

妹 うん。

夫 本当にひどい目にあってきたよ。僕たちは。

妹 うん。

夫 でも、たまに思うんだ。あのとき本当はハムあったんじゃないだろうか。

妹 うん。

夫 だって、おかしいんだよ、僕も、親父も、ベーコンそんなに好きじゃなかったんだ、それなのに、なんで家にベーコンがあるんだ。あのとき本当はハムあったんじゃないだろうか。

妹 うん、そうね。

夫 ハムあったんじゃないだろうか。

妹 うん。

夫 お母さんはわざとベーコンを出したんじゃないだろうか。

妹 なんて。

夫 わからない。というか、そんなことないよ。そんなバカバカしい。

店の奥から妻と客の笑い声が聞こえる。

兄が店の外へ出ようととする。

妹 どこ行くの？

夫 ちょっと。

(鈴が鳴る)

兄はおたまを持ったまま店から出ていく。妹もそのあとを追う。

しばらくして、妻と客が奥から現れる。

客 あの、旦那さんがいらっしゃらないのですけど。

妻 え、そうですか。

客 はい。

妻 何も言わないで出ていくななんて不思議。

客 なにかあったのでしょうか……

妻 あ、いえ、お気になさらないで。今日はいろんなお話しできて、とても楽しかったわ。

客 こちらこそ、ごちそうになりまして。ご主人はすごくお料理が上手ですね。

妻 この前なんて洋食屋さんをやりたいて言ったりして。

客 本屋さんやめちゃうんですか。

妻 わからないけども。

客 なんか、もったいない気がします。

妻 そうですね。

客 ご主人はなんかすごく、本屋さんっぽいというか、すごい似合ってると思うので、あ、でもコックさんも似合うかもしれない。

妻 そうですか？

客 あ、はい、ご主人はすごくコックさんっぽい顔をしています。あのコックさんっぽい顔というのは、その、素敵な顔ということです。

妻 わたしの主人は素敵な顔をしているのですね。

客 はい。それに親切で、優しく、お料理もおいしくて、うらやましいです。わたし、男の人とおつきあひしたことないので……

妻 あら、そうなんですか。

客 はい。あ、「わたしたちおつきあひしてますよね」って聞いたら「ちがうよ」って言われて、わたしが勘違いしてただけっていうのは何度かあるのですが……

妻 でも、わたしも主人だけですよ。

客 え、一発ですか。すごい。

妻 わたし身体も弱くて、あまり学校や外にでなかったものですから、お友達もほとんどいなくて、殿方とお話することだって全然。

客 あ、あの、今後の参考におうかがいしたいのですが、ご主人とはどこでお知り合いになったのですか？

妻 病院ですわ。わたしが、しばらく入院していたときに、主人も、お義父さまだったかしら、お見舞いによくきていたらしくて、そこで。

客 なるほど入院ですね。

妻 わたし、調子の良い日はなるべくお庭に出るようにしてたのですが。お庭に鳥かなにか迷い込んでいたんでしょね。主人がわたしに「見ましたか」って尋ねて、「目が悪いので、ほとんどなにも見えないのです」ってお答えしたんですけど、わたし、主人と会ったのが、それがはじめてじゃなかったんです。わたしがずっと子どもの頃に、同じ人が、同じ質問をしてたんです。わたしに。「見ましたか？」って。

客 はあ。

妻 「見ましたか？」って。わたしはそのことばずっと覚えていたのに、あのひとは全然覚えていなかったのですよ。あのときは、犬のことを言ってたんでしょかね。

客 やっぱ、そんな運命みたいな出会いがないとダメなのでしょうか。わたし、子どものころ、知らないおじさんから「ぼくの宝物みにこないかい？」って言われて、そのあと大変な騒ぎになったことがあるんですけど……

妻 でも、わたし、家族ももう主人だけで、お友達がたくさんいてうらやましいわ。

客 いえ、全然、友達なんてそんなにたくさんいないです……

妻 プレゼントをできるような友達なんてわたしにはいないから。ねえ、消防車が好きなお友達。

客 じゃあ、あの、今度、一緒にその、赤ちゃんに会いに行きませんか？

妻 え、でも、知らない方ですし。

客 すごく良い人なんです。前の職場の先輩なんですけど、だから、わたしのほかにも友達になってほしくて……この近くに住んでいるので。

妻 本当によろしいんですか？

客 はい、是非。

妻 うれしい。わたしもなにかプレゼントを用意なくちゃいけませんね。消防車のほかになにか好きなものあるのでしょうか。

客 えっと、食べ物だとカツオブシが好きでした。

妻　　そうですか、じゃあなにかご用意しますわ。

客　　はい。

妻　　あ、すみません。立ち話でこんな長々と。

客　　いえ、そんな。こちらこそ。

妻　　じゃあ、またね。

客　　はい、また。

(鈴が鳴る)

客が店を出ていく。

(鈴が鳴る)

妻　　あなた？

夫　　……

妻　　ヨウコさん？

夫　　急にいなくなってしまうてすみません。

夫、手におたまのような、人の腕のようなものを持っている。

妻　　いえ、今、お帰りになられたところですよ。

夫　　さっきすれ違いました。妹も帰りました。こどものお迎えがあるので。

妻　　そうでしたか。

夫　　僕も急用ができて。場を濁すのもなんでしたから、黙って出てってしまいました。

妻　　そんなお気遣いなさらずとも良かったのに。

夫　　すみません。

妻　　あなた、今度あの方のお友達の赤ちゃんにお会いすることになりましたの。

夫　　え、赤ちゃんにですか。

妻　　ええ、この近くに住んでるそうなんですよ。

夫　　そうですか。

妻　　わたし、本当の赤ちゃんに触ったことないので、本当に楽しみ。

夫　　赤ん坊なら、妹のところにもいますよ。

妻　　え、でも、ヨウコさんのところはもう少し大きな子ではないのですか？

夫 そうでした？

妻 もう歩き回るくらいの年頃だと言ってたじゃないですか。

夫 そうでしたか。

妻 あ……それにいつ会えるかもわかりませんし。

夫 そうですね。

妻 もしかして、お食事にお誘いしたこと、お気にさわったりとかしていませんか？

夫 そんなことはありませんよ。

妻 でも、わたし、せっかくヨウコさんもいらしてたのに、それを忘れて、勝手なことをして、もしかしたら怒ってらっしゃるのではと。

夫 いいえ、大丈夫ですよ。

妻 あなた、一度もわたしをお叱りになったことはありませんから。

夫 当たり前じゃないですか。お友達のところ、いつでも遊びに行ってもいいですよ。

妻 ありがとうございます。

夫 お礼をいうことじゃないですよ、そんな、亭主関白ではあるまいし。

妻 わたし、小さな頃から、ずっと1人でしたから。あなたとお会いしてからは2人になれましたけれど、身体も弱いし、目もどんどん悪くなってくる。どんどん世界が閉じてしまっていくようで。恐ろしくなってしまうんです。

夫 僕がいてもですか。

妻 あなたがいて、わたしはだいぶん、助かっているのだけれど、あなただけに頼ってばかりもいられない気がして。あなたにもずいぶん負担をかけているのではないかしら。

夫 そんなことはないですよ。

妻 わたしにばかり構わせてしまって。

夫 僕は、本当のことを言えば、君だけがいれば十分なんだ。

妻 ヨウコさんは？

夫 妹はだって、家族だから。

妻 そうですね。

夫 ……でも、本当は、僕は家族というものを知らないのかもしれない。僕の父親は、外面ばかり良い古書店の店主で、僕たちにとっては本当に酷いやつだった。殴ったり蹴ったり、口では言えないような酷いこともしたんだ。母親だって時には自分が標的にならないように、時には僕たちを生け贄を捧げたりもしたんだ。僕は家族というのを本来知らないんだ。僕は君に会って、はじめて、自分、自分の、本当の家族が作れるような気がしたんだ。

妻 わたしもそうだわ。ずっと1人だったの。



夫 妹はねえ、うまくいってるんだよ。良き夫がいて、かわいい子どもがいる。妹はうまくいくはずなんだ。

妻 あなたも素敵な旦那さまだわ。

夫 本当にそうでしょうか。

妻 本当にそうですよ。

夫 ……先方におうかがいするのでしたら、お土産を用意しないとイケませんね。

妻 カツオブシが好きだっておっしゃってたけど、それはお母さんのことでしょうか、赤ちゃんにもなにかプレゼントしないと。

夫 妹に聞いてみましようか。

妻 あなたも一緒に考えましようよ。

夫 それにしても、カツオブシが好きだなんてなんででしょうか？ それだけで食べるのかな。

妻 なんだか猫みたい。

夫 帰る途中に黒猫を見かけました。

妻 わたしも夜中に鳴き声を聞きますよ。黒猫かはわかりませんが、何匹かいるみたいで、まるでお話ししているみたい。

夫 喧嘩してるのかな。

妻 喧嘩だと悲しいわ。仲良くしてほしいのだけど。

おわあ、おわあ

夫 まるで赤ん坊の泣き声みたいだ。

妻 おわああ

どんなうわさ話をしてるんでしょうか。

夫 まっくろけの猫が二ひき

なやましいよるの屋根のうへで

ぴんとたてたしっぽの先から、

いのようなみかづきがかすんでいる

妻 おわあ、こんばんは

おわあ、こんばんは

おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ

おわああ

(ここの家の主人は病気です)

数日後

店主が店のカウンターに座っている。

(鈴が鳴る)

出かけていた妻が外から客の手に引かれて帰ってくる。

妻 ただいま帰りました。

夫 おかえりなさい。

妻 すみません。送っていただいて。

客 いえ、だって、ついこの前もまたひとさらいがでたそうなので。

夫 僕が迎えに行ってもよかったのですが。

妻 あ、でもすぐ近くでしたから。本当にかわいい赤ちゃんでしたよ。やわらかくて、丸くて。

客 ね、丸いですよね！

妻 ほんとう、あんなに丸いなんて。

客 プレゼントも喜んでいました。

妻 主人と一緒に選んだんですよ。

客 今度は、ご主人もご一緒にどうでしょうか？

夫 僕は、いいですよ。お店もありますし。だいぶ疲れたんじゃないかな、奥で休むといいよ。

客 もしかして、無理をさせてしまったのでしょうか。

妻 そんなことはありませんわ。本当に楽しくて。でも楽しすぎて、ちょっとだけ、疲れたかもしれせん。

客 じゃあ、わたしは、これでお暇いたします。

夫 お送りしますよ。

客 いや、そんな見知った街です。

夫 でも、また、ひとさらいがでたのでしょうか。せめて駅まででも。

妻 ぜひそうしてください。

客 では、おことばに甘えて。

夫 君はもう休んでいなさい。

妻 ……そうですね。そうさせていただきますわ。

客 じゃあ、またね。

妻 またね。

妻が店の奥に去る。

客 あ、あのいただいた本、読みました。

夫 読めたんですか。

客 あ、はい。あの、辞書を引き引き、でも、たぶん、2割もわかってないような気がするのですが、最後まで読みました。とても面白かったです。

夫 そうですか。

客 あの、食べ物がでてくるシーンがすごくおいしそうでした。パンに合いそうなものばかり食べていて。

夫 楽しんでもらえてよかったです。

客 はい、あと、主人公の女の子がすごく美しく、すごく贅沢で、みんながその女の子を好きになって、わたし、そういうひと見るといつも、うらやましいなって思うんですけど、ちっともうらやましく思いませんでした。

夫 そうですか。

客 すごく面白かったんですけど、みんな、その女の子のこと好きになるのに、みんなすごくつらそうで、で、そのことでみんなひどいめにあうので、そんなんだったら、わたし美しくなくていいなあ、でも、今でも全然うつくしくないんで、だから、その点はわたしは大丈夫なのですが。

夫 そうですか。

客 わたしは、ひとを好きになるのはとてもよいことだと思っていましたが、ほんとうはそうではないのでしょうか。

夫 人を好きなることは、良いとか悪いとかとは関係ないのかもしれませんが。

客 でも、わたしが好きになったひとや、わたしのことを好きになったひとが、ひどい目にあったり辛く思ったりするのは、どうしてもそれはいやだなと思うのですが、でもわたしはすごく鈍くさいので、わたしはそれで人に迷惑をかけたりので、だとすると、わたしは、あまり人を好きになってはいけないのではないかと思いました。

夫 そうですか。

客 でも、きっとわたしは人を好きになることはやめられないような気がします。

夫 そうですか。

客 これではまるで悪夢のようです。

夫 ……そろそろ行きましょうか。道中で、本の感想をもっときかせてください。

客 あ、はい。

(鈴が鳴る)

店主と客が店の外へ出て行く。

しばらくして、妻が奥から戻ってきて、書店の中をゆっくりと巡る。

妻 『奥さまはまるでお姫様のようですね』『本当にとっても大事にされてる』『ご主人の本屋さんは本が  
うず高く積みあがっていて、こう古めかしくて、まるでお城みたいで……』

(鈴が鳴る)

夫 起き……

妻 ヨウコさん。

夫 ……

妻 ねえ、ヨウコさん。

妹 ……なに？

妻 今日はとても楽しい1日でした。でも、明日は熱が出るかもしれないわ。

妹 じゃあ、休んでないと。

妻 赤ちゃんって、ほんとに柔らかくて、丸くて、はじめは本当におっかなびっくりでしたけど、抱か  
せてもらって。きっと顔もかわいいんでしょうね。ねえ、ヨウコさんのお子さんもきっとかわい  
いんでしょうね。

妹 そりゃそうよ。

妻 ヨウコさんに似てるんですか。

妹 まあ、どちらかといえば私似。

妻 では、主人にも似てるんでしょうか。

妹 うーん、どうだろう。私と兄さんがそもそもあんまり似てないって言われてたから。

妻 わたし、主人とはじめてお会いした時、主人の話したこと1から10まで全部覚えているんですけ  
ど、わたし、「妹に似ている」って言われたんですよ。

妹 そうなの。

妻 だから、わたしも、主人に似てるんじゃないかと思ってました。似たもの夫婦なんて素敵でしょう。

妹 そうねえ。でも、似てるかしらねえ。

妻 わたし、本当のことを申し上げますと、ヨウコさんに嫉妬しているわ。

妹 ええ、なにそれ。

妻 本当のヨウコさんってどんな方だったのかしら。

夫 ……

妻 ねえ、あなた。

夫 なんだい。

夫が外から戻ってきている。

夫は表紙にペンギンのような絵が描かれた絵本を持っている。

妻 わたし、あなたにお聞きしたくて、ずっと我慢していたことがあって。きっとお気を悪くするかもしれないと思ったのだけれども。でも、やっぱり今、おうかがいしてもよろしいでしょうか？

夫 どうぞ。

妻 本当のヨウコさんはどんな方だったのですか。

夫 ……

妻 わたしは、ほんの時折ですけども、わたしはあなたの妹の、代わりなのではないかしら、そんな風に思ってしまうことがあるの。

夫 そんなことは絶対にありません。

妻 ねえ、本当のヨウコさんはどんな方だったのですか。

妹 わたしは、わたしよ。

妻 目が悪くても、あなたの声を聞きわけて、まだあなたの影を追うことくらいはできますわ。

夫 妹は……

妻 ねえ、あなた

妹 ……本当の妹は、彼女が八歳の時にいなくなりました。人さらいにさらわれたのです。見つかったのは赤いランドセルだけでした。僕と妹はそれまでずっと一緒でした。妹が一緒だったなら、僕はあの気違いの親からも、二人で耐えることができたのです。

夫 妹は僕で、僕は妹だったんだ。

妹 でも君は僕じゃない。君は妹じゃない。

妻 わたしは、あなたの妻です。

夫 そうです。君は僕の妻です。君は僕の、ただ一人の、唯一の、他人です。……ああ、妹が今帰りました。……だから、僕も君に言わなければいけなくなった。

妻 なんですか？

夫 僕はひとさらいなんです。

妹がいなくなってから、僕の頭の中に、例えてしまうとバカバカしいのだけれども、悪魔が住み着

いているように感じたんです。それは、妹は関係ないのかもしれない。あの忌々しい父親の血かもしれないし、ただただ僕が神様に与えられた罰だったのかもしれない。

最初は学校の鶏で、次に近所の野良猫で、それから誰かが飼っていた犬で、だんだんと大きくなって、欲望が頭の中にグルグルと渦巻いて、たまにピタリとやむときがあっても、一度また動き出すと、感情が溶けていくんです。

最初に小さな君に出会ったとき、君は「なにも見えない」と言った。僕はそのとき、とてもほっとしたんだ。なぜだか、今まで生きてきた中で、一番、安心したんです。

あのとき、あの病院で、君にまた会えたのは、本当にうれしかったんです。

妻 わたしも、うれしかったわ。

夫 ただ僕は、君の目が良くないのを、利用してるだけなのかもしれません。でも、そうだとすると、僕はやはり、君を愛しているのです。もしかしたら、僕は、君によって、僕の中の悪魔が、きれいさっぱり消え去ることを期待していたかもしれません。でも、そうはならなかった。でも、僕はやはり、君を愛しているのです。

君はすぐに警察に行って、僕のことを通報してください。ここの財産は、僕が傷つけてきたひとのために、だいぶ失われるかもしれない。でも、少しは残るかもしれない。そしたら、そのお金で、どこか静かな場所に越して、また誰かを好きになってください。

妻 あなたは死刑になるのですか。

夫 はい。僕が今までのことをすべて話せば、きっと死刑になるでしょう。……今の死刑は絞首刑ですよ。首吊りというのは、なにかみっともない気がして、本当は気がすすまないのですが、仕方ありません。昔は電気椅子というのもあったのですが、これは失敗が多かったりして、いたずらに苦しめるからなくなったそうですね。苦しむ分にはいっこうにかまわないのですが。もっと昔はギロチンがありましたね。僕は本当はこれが一番いいかなと思っているんです。首と胴が離れた瞬間、一瞬だけ脳に血がまわっている分だけ意識が残ってるそうなんです。それで、僕はその自分の離れた胴体を見たいんです。

妻 はい。

夫 変な話をしてすみません。

妻 わたし、あなたがいつも楽しく過ごせるように、どんなこととお話ししたら喜んでもらえるかしらって、いつも考えたりしてて、だってわたし、あなたとお話ししているときに、本当にわたしの生活のほとんどでしたから、あなたと今、なんておしゃべりしたらいいか、あなたになんてお答えしたらいいのかわからないのですけれども、でも……わたしに残された最後の望みは、あなたの首が切り落とされたとき、その血しぶきの噴き出す音を、わたしの、この耳で聴くことですわ。

夫 おもしろいですね。

妻 ……では、行って参ります。

夫 行ってらっしゃい。気をつけて。

(鈴が鳴る)

妻が確かな足取りで、店の外へ出て行く。もう戻ってくることはない。

夫は妻を見送った後、カウンターに座り、絵本を読みながら、物語が終わるのを待つ。

おわり

※作中引用詩

萩原朔太郎

「鶏」

「遺傳」

「猫」

※作中言及作品

エドワード・ゴーリー「うろんな客」

村上春樹「パン屋襲撃」「パン屋再襲撃」

森茉莉「甘い蜜の部屋」

※登場人物モデル

ペーター・キュルテン

※問合せ先：日本のラジオ 屋代秀樹

[info@razio.jp](mailto:info@razio.jp)